・調査結果の要約

男女平等に関する価値観について

問1で7つの分野(「家庭生活で」「職場・職業で」「地域社会で」「学校教育で」「法律や制度の上で」「政治の場で」「社会通念や慣習、しきたりで」)での男女の地位の平等感について訊いたところ、7項目の平均値の推移をみると、「平等である」と感じる割合は 18.3% (H10)、27.0% (H15)、33.4% (H21)と調査毎に毎回上がっています。

項目別に「平等である」と感じる割合の推移を見ても、「社会通念や慣習、しきたり」では1割以下に下がったものの、その他の項目では平等と感じる割合は上がっています。しかし、7割以上が平等感を感じている「学校教育」以外を見ると、「法律や制度」「地域社会」「家庭生活」はいずれも3割台、「社会通念や慣習、しきたり」では1割以下の状況です。

男女別に見ると、「学校教育」を除く全ての項目で、女性よりも男性のほうが「平等である」と感じている割合が多くなっています。

男女の役割分担や家庭生活について

問2の「男は仕事、女は家庭」という男女の役割を分担する考え方については、男女とも「同感しない」人の割合が「同感する」を上回っています。また、調査を重ねるごとに、男性の「同感しない」人の割合が増えており、平成10年度調査では男性の割合が低く女性の意識と差が開いていましたが、今回調査で男女とも4割強になりました。

問3「女性の就業について」では、「出産や育児期間は一時的に退職して子どもが成長したら再び職業を持ったほうがよい」に次いで多い「結婚・出産・育児にかかわらず、職業を持ち続けたほうがよい」と考える女性が増えています。

問4「家事や育児の役割分担について」では、「手の空いているほうが行う」と回答した人が最も多く、全体では5割近く、次に「主に男性は女性を手伝う程度」、「男女とも平等に」と続きますが、「平等に」と回答する人は男女とも、調査毎に毎回増えています。

問5で「実際の家事の分担」について訊くと、ほとんどの家事において女性が主に担っており、特に「掃除」「洗濯」「食事のしたく」は女性の7割以上が「主に自分が行っている」と回答していますが、平成10年度調査結果に比べ、「配偶者や家族と分担」と回答した人の割合は、ほとんどの項目で男女とも増えています。

問6「子育ての考え方について」では、まず「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく」育てることについて訊いたところ、男女とも肯定する人が多く、男性は7割、女性は5割強の人が選択しています。一方、否定する人の割合は、3回の調査を通じて常に女性の方が多くなっています。子どもに対して「男の子/女の子らしさ」を期待するのは男性の方が多く、否定するのは女性の方が多い状況です。

3歳くらいまでの子育てを「母親の役割」と考える人の割合は、男性より女性が大きくなっています。また「同感しない」と考える人は、平成15年度調査までは女性が多かったのが今回の調査で逆転し、男性の方が多くなりました。女性の方が「女性の役割」と意識する傾向があります。

「保育園や幼稚園の送り迎えやお弁当づくりは母親の役目」という考え方については、今回肯定する人と否定する人はどちらも同じ3割程度です。男女とも初回調査時から否定する人が増え続けています。

「家事の手伝いは男女平等にさせる方がよい」という考え方については、男女とも肯定感が高く、特に女性は8割が選択しています。しかし調査毎に見ると、前回までは男女とも約8割が「同感する」と回答していたのが、今回は男性の割合が大きく減っています。

問7「家族の介護について」では、男女の意識の割合の状況はほとんど同じです。「女性のみ介護させない」の回答が最も多く約5割を占めています。また「平等に介護すべき」と考える人は、3回の調査を通じて増えています。

仕事と生活の調和について

問8で希望するライフスタイルと現実(現状)の状況を聞いたところ、男性の希望で一番多かったのは『「仕事」と「家庭生活」を優先』でしたが、現実では「仕事」を優先している人が多くなっていました。また女性は希望では『「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」』を、現実では「家庭生活」を優先している人が多くいました。男女とも多くの方が「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」のどれかに偏らずに生活したいと考えていますが、現実には男性は「仕事」、女性は「仕事」または「家庭生活」のどちらかといったように、1つを優先している人が多い状況です。

次に問9で「男性が家事・子育て・介護・地域活動に参加する際に必要なこと」を聞いたところ、男女とも多くの方が「夫婦・家族間のコミュニケーションをよくはかる」と回答しています。その他、メンタル面の「参加することに対する男性自身の抵抗感をなくす」、制度面の「労働時間短縮や休暇制度を普及し、仕事以外の時間をより多くもつ」、また啓発内容として「社会の中で、男性による家事等についての評価を高める」が多くあがっていました。

男女の人権について

問10から問14では配偶者等からの暴力(DV:ドメスティック・バイオレンス)、セクシュアル・ハラスメント(性的いやがらせ)といった人権侵害の状況を聞いています。「被害を受けたことがある」と回答したのはいずれも女性のみでDV、セクハラともに約1割。被害を受けた人を知っている人は、DVが全体の2割、セクハラが1割強、また20人に1人は「相談を受けたことがある」と答えています。

また若い世代の被害の実態を確認するため、問14で10、20代の時の被害経験を聞いたところ、「身体的暴行」「精神的嫌がらせや脅迫」「性的行為の強要」の中で1つでも受けた経験のある人の割合が一番高かったのは「女性・20代の時」で、12.0%の女性が「20代で被害を受けたことがある」との回答がありました。

市の政策について

問15で採り上げた男女共同参画に関連する言葉の中で、「男女雇用機会均等法」と「男女共同参画社会」は認知度が高い一方、他の6つの言葉の認知度は3割以下でした。更に「見たり聞いたりしたものはない」と回答した人が男女とも1割程度います。

問16で市に望む取り組みを聞いたところ、男女とも特に希望度が高いのが「介護サービスの充実」と「育児、保育サービスの充実」で、前回同様です。特に女性の希望は家事に関するこの2つに特化しています。男性は「学校教育での男女平等教育の推進」と「企業や事業主に対する男女共同参画意識の啓発」といった社会環境の整備について希望する人が2割以上いました。

全体をとおして

前々回調査(平成10年)、前回調査(平成15年)と経て今回の結果を見ると、全体的には「男女平等」の状況が進み、平等を志向する意識も高くなっていますが、「法律や制度」「地域社会」など、多くの場面において調査毎に平等感が増している中、各人の潜在意識や思考、行動への影響が大きいと考えられる「社会通念や慣習、しきたり」については圧倒的に多くの方が男性優遇感を感じています。また、男女別に見ると、男性は家庭における役割の平等を志向する意識が高まり、女性は就業に対する積極性が高くなっています。

一方、子育てに関しては性別で対応を限定する傾向が現れています。子育ては母親の仕事と考え、子どもの「男/女の子らしさ」を好ましく感じ、家事の手伝いを平等にさせることに同感しない人が今回増えました。

またワーク・ライフ・バランスを改善し、男女共同参画を推進するためには、社会的な制度の整備だけでなく、夫婦や家族間でコミュニケーションをはかりながら互いに役割を担っていくことが必要だと、多くの方が考えていることがわかりました。